

特集

座談会 子ども食堂の未来は？

～鯖江市、あわら市、越前市、福井市～

平成26年の厚生労働省の発表で、6人に1人の子どもが貧困状況にあることが、明らかになりました。お金がないことにより、家族で旅行をしたことがない、ユニホームや道具が必要なクラブ活動への参加を諦めなければいけない、塾に行けない、大学に進学したくてもできないなど、多くのチャンスと経験を失います。そして、大人になったときにまた、貧困家庭を築いてしまうという貧困の連鎖が生まれます。地域の子どもの、地域が見守り、学びや暮らしを有機的に支えるネットワークをつくり、子どもの未来を明るく変えていきことが大切です。

今回は、県内で子ども食堂を運営する4団体の代表の方たちに集まっていただき、開設のきっかけや運営内容などについて、話し合っていました。



ゆるい食堂実行委員会(鯖江市)
実行委員長 小西 希依さん



子ども食堂 まる(あわら市)
代表 渡邊 一幸さん



みんなの食堂(越前市)
代表 野尻 富美さん



ひまわりキッチン(福井市)
代表 白崎 順也さん



「子ども食堂 まる」での調理の様子

渡邊 わたしたちの場合、貧困というより、不登校がスタートでした。以前から不登校の生徒を支援する取り組みを行っていたのですが、ある時、中学校の先生から、ある不登校の生徒について、何か支援できないかと依頼されました。たまたま学校から依頼を受けて訪問した際、母親がコンビニ弁当を届けている場面に遭遇しました。そこで、母親の同意をもらい、「うちおいでよ」と誘い、子ども園の昼食を食べさせてあげました。3年前から、週に2〜3回、時間になると電話して、食べに来てもらっています。それまでの昼寝や夜ゲームすると生活リズムが一変しました。そのうち、高校にも行かしてあげたい、卒業式にも出させてあげたいという思いが募り、現在、高校にも通うことができます。

—子ども食堂を始めたきっかけは。

小西 きっかけは、2点あります。一点目は孤食と貧困の問題。鯖江市の人口は増えていますが、共働きの世帯が多く、子どもが一人でご飯を食べているケースが多いのが実情です。また、貧困については、明らかに成長が遅い子どもがいます。そういう子どもたちに、楽しく食べる喜びを知ってほしいという思いがありました。もう一点は、余った食材が廃棄されるといふ点です。特段問題はなくても、形が悪いまたは傷がある、賞味期限は切れているが、消費期限は切れていないなど否応なく食材が捨てられるという現状があります。そういった話を聞いていたので、余った食材を活用して子どもたちに食べる喜びを知ってもらおうという一連の流れを考えました。

白崎 わたしたちのグループでも、子どもの貧困という問題は承知しています。そのとき、何かしたいという課題を感じていました。そんな中、もし、近所に住んでいる人たちが集まったら、そのこと自体でつながりができると思い、みんながつながるための子ども食堂を平成28年9月から開催しています。

野尻 これまで高齢者のデイサービスや子育て支援など、制度に則って集える場所がありました。しかし、わたしたちには、そのすきまを埋められるといいのになという思いがありました。例えば、不登

校や相談室登校の子どもたち、元気な高齢者、サービスのすきまにいる方たちの居場所作りです。子どもの貧困については、金銭的貧困だけでなく、「心」の貧困等いろいろな貧困があると思ったので、所得等で制限されることのない誰でもいろんな世代の人が集える場所。そういうものを目指したかったです。当時、子ども食堂がブームでしたが、子ども食堂というより、みんなで一緒に食事をすることを「きっかけ」にする食堂でした。平成28年の4月からスタートしました。現在、越前市内で2箇所（平出店、王子保店）運営しており、ともに月2回開催しています。また、毎週木曜日には所得制限のない、誰でも参加できる学習支援も行っています。

―開設場所や時間は―

渡邊 わたしが園長を務める「あわら敬愛こども園」の中で開設しています。1年半前にリフォームを行い、子ども食堂用のキッチンを2箇所つくりました。

小西 わたしたちは、アイアイ鯖江の2階で開催しています。調理室で調理をし、隣の和室で座卓を並べて食事をしています。毎回、9時から調理を始め、11時40分頃になると、子どもたちが集まってきたり、12時になったら合掌して食べ始めます。終了は13時くらいです。配膳とごみの処分について



「ゆるい食堂」での食事風景

は、参加者でもらっています。

白崎 県の社会福祉センター、明新公民館で開催しています。最初は福井市新田塚の自治会館で開催していましたが、手狭なうえに、給湯室だけしかありませんでした。また、食べ物をみんなで持ち寄っていました。やはりみんなで調理したほうが楽しいし、子どもにも楽しんでもらえます。現在は、各会場で月に1回開催しています。時間は、県の社会福祉センターは朝11時頃から子どもたちがやって来て、調理を始めます。13時頃に食事を終えて、14時に終了となります。明新公民館は夜の時間帯に開催しています。17時頃から子どもがやって来て、ご飯を食べ、20時くらいに終了します。

野尻 わたしの勤める「医療法人野尻医院」裏のデイサービスを開設していた場所が、現在は高齢者のサロンになっています。その空きスペースを活用し、子ども食

堂を開設しています。ただ、医療法人の所有なので、ボランティア団体が使用すると法律上抵触してしまいます。そこで県と協議し、空き時間に活用するという条件でOKをいただきました。しかし、本来であれば、営業許可や保健所の申請が必要だそうです。みんなと一緒に作るという条件で、認めてもらいました。調理は基本的にスタッフが行っていますが、どこかで参加者に関わってもらおうというポイントを入れ、みんなで作ったものを食べるという形をとっています。時間は、15時頃から調理を始め、16時くらいから子どもたちがやって来て、18時頃から食べ始めます。20時には終了します。

渡邊 わたしたちは、開設時点で保健所に相談しました。保健所間で融通してもらい、子どもが関わるといふ条件で認めていただきました。

―食材はどのように調達していますか。―

小西 食材については、調理スタッフの家から持参する物もありますが、ほとんどは、スーパーや惣菜屋さん、肉屋さん、自然食品のお店などを訪問し、いただいています。大部分は前日いただきますが、生物だと当日の朝にいただくこともあります。また、県民生協さんは、調味料も提供してくれています。だから、食材集めには

ほとんど苦労はしていません。夏は野菜、冬は芋類が多いなどありますが、大変助かっています。また、スイーツもケーキ屋さんに分けてもらっています。毎回じゃんけん大会を行い、勝った人にプレゼントしています。

白崎 地場の野菜とお米、スナック菓子をたくさんいただいて、大変助かっています。肉と魚、調味料は買っています。

野尻 月に1回、お肉屋さんからお肉を提供していただいています。お魚についても漁師さんから定期的にいただくことができます。不漁の時でも分けていただけることに大きな感謝をしています。また、野菜等についても、市場やスーパーから支援いただいていますし、地域の方からの差し入れも多くいただいています。



「みんなの食堂」での食事風景

渡邊 三国町の方から海産物、坂井町の方からは、お米やいろいろな野菜をいただいています。地域とつながりたいという思いから、「ファーマーズ

マーケット きららの丘」とつながるようにになりました。

―スタッフや参加者は何人くらいですか。

渡邊 調理スタッフを含め、ボランティアの人たちが18人、市内子ども園の保育教諭が2人、子どもが20人、参加者全体では40人くらいです。

小西 スタッフで約20人。子ども、親御さん併せると約100人になります。内訳は、大人約50人、子ども約50人。集合住宅が密集している地域、いわゆる貧困や孤食が多いと思われる2つの小学校にチラシを配布したところ、大変反響がありました。フェイスブックやインスタグラムなどSNSにも投稿し、参加者の口コミでも広がっています。

野尻 子どもは、平出店で20人前後。王子保店は7〜8人。高齢者など地域の方を併せると、参加者は、平出店では計50人、王子保店は20人程度になります。調理スタッフはほぼ同じ方に来ていただいています。わたしたちは余力で運営することが大事だと思っていますので都合がつかない時には他のメンバーで助け合っています。

小西 「ゆるい食堂実行委員会」に入っている学生は3〜4人。調理スタッフとして、友達や後輩にも参加を呼び掛けています。SNSでつぶやくと反響があります。

調理スタッフは日によってマチマチで、主婦の方や、現場でつながって、そこから口コミで広がって参加してくれるメンバーもいます。

白崎 希望者はどんな人でも参加してもらっています。調理スタッフは15〜20人。大学生が5人程度。子どもが30〜40人。その親御さんが10人程度。合計で70人くらいになります。調理スタッフはボランティアの趣旨が強いと思います。

小西 高齢の方が、お孫さんと一緒に来るケースもあります。1階で健康診断や高齢者向けの講座に参加している方が、イベントに気づいてやって来るケースもあります。

―運営資金はどのように工面していますか。

小西 運営資金として、鯖江市のまちづくり基金事業(※)を活用し、30万円をいただいています。施設使用料や、万が一の場合の調理スタッフの傷害保険料、食中毒対策の保険料などに活用させていただきます。また子どもたちも安全に調理に参加できるよう、通常の食堂の開催とは別に2か月に1回程度、火を使わないワークショップ(おにぎり作りや、翌年度の食堂で活用するための味噌作りなど)を企画しています。いずれも参加費はいただいています。

※市民活動団体やボランティア団体等が自主・自発的に行うまちづくりに役立つ公益的な事業に対して、助成される。

野尻 個人と企業からの寄付。また、学習支援を開始するにあたり武生ロータリークラブさんからも寄付をいただきました。チラシ等

は特に配布していません。寄付を募りながら口コミで広がっています。また、共同募金助成金や県のシニヤ人材活躍奨励金をいただきました。参加費は300円ですが、子どもは無料です。その分、後片付け、掃除をきちんとしてもらっています。スタッフからも参加費をいただき、合計でおおよそ5〜6千円になります。材料も一部寄付などでいただくので、1回1万円程度の予算で開催できています。

白崎 参加費を大人300円、子ども100円いただいで、食材費に充てています。また、助成金を初年度は県社協、次年度は県民生協から、また、活動のための寄付もたくさんいただき、感謝しています。



「ひまわりキッチン」での食事風景

渡邊 あわら市内に子ども園は10箇所あります。1園3万円寄付を

いただき、30万円の予算で賄っています。スタッフは300円、参加者からは、大人200円、子ども100円いただいています。

—これからの目標は。

渡邊 2号店のオープンについては、今後、スタッフと協議していきたいです。また、子ども食堂は子どもの貧困だけが目的ではないと考えています。学習支援や一人暮らしの高齢者の訪問なども目的の一つだと考えています。地域貢献や引きこもりの問題、就労支援なども含め、子ども食堂に特化しない形での取り組みも必要だと思います。

小西 当初の目標が、子どもが最終的に自分でご飯と味噌汁を作れる力を身につけてほしいということでした。ただ、調理となると、事故の心配や保護者の同意も必要となります。そういう意味でワークショップがベストではないかと考えました。一緒に作って楽しみ、また、食にも関心を持ってほしいと思います。

白崎 子ども食堂においては、隣人でのつながりを持つことが重要だと思います。いろんな人がいろんな場所で取り組むのがわたしたちの願いです。子ども一人ひとりが幸せな人生を送ってほしいと思います。

野尻 越前市には、校区が17あります。1校区1箇所できるのが理

想だとは思いますが。自分の校区でないところに参加する方が参加しやすいという声も聞くので、選択肢として少しでも多くの「みんなの食堂」ができるといいなと思います。また、わたしは「子ども食堂」というネーミングに違和感を持ってしまいます。今はまだ、「子ども食堂＝貧困家庭」というイメージが強いと思います。これだと、可愛そうな子でスタートしてしまいます。地域の中の居場所として、不登校の生徒や高齢者など、いろんな世代の人が自由に参加でき、みんなと食えることをきっかけにして、参加者の困り事や、悩みをみんなで聞いたりはきだしたり、専門家や相談員につなげることだと思います。みんなで話すだけでなく、すっきりして解決してしまうこともたくさんあります。わたしたちは、来られた方が、「あー楽しかった、また明日から頑張るわ!」と、思ってもらえる場であり続けたいと思っています。

渡邊 地域のコミュニティを復活させるようなつながりが出てくれば、子ども食堂の意義が出てくると思います。

野尻 近所の人同士がつながって、また別のところで会ったときに、助け合ったり、相談し合ったりするのが理想だと思います。

小西 わたしたちは、食や歯、栄養学に関する事など、毎回、食後に、紙芝居をしています。また、「ゆるい食堂実行委員会」の母体

である「ゆるパブリック」の方々を講師に招き、1時間程度学習会もしています。「アクティブライニング」といって、自分の潜在能力を引き出す取り組みも始めました。今後も、引き続き取り組んでいきたいと思っています。

—行政に対する要望は。

小西 利用させていただいている「アイアイ鯖江」という会場は、鯖江市が運用管理する施設のため、わたしたちのような民間イベントでの利用の場合は予約が取りづらく、曜日を限定することなく、開催候補日を広げていくことができれば、調理スタッフも、食べに来てくださる方々にも、参加の幅が広がるのではないかと考えています。

白崎 お隣の滋賀県には、だれでも簡単にアクセスできる子ども食堂をたくさん開設する、という目標があります。知事が先頭に立つて様々な行政組織や社協、既存の福祉団体が積極的に関わり、その結果、子ども食堂の数はすでに日本一です。わたしたちの福井県もそんな雰囲気になることを願っています。

野尻 最初は、「月に1〜2回子どもにご飯を食べさせて何になるのだ」と言われた時もありました。しかし、ここに来てようやく「みんなの食堂」、が市民権を獲得し始めたと思います。わたしたちが、

地域の中で、どういった役割を担えるかをいっしょにこれからも考えながら活動していきたいと思えます。また、行政には例えば、人材バンクの有効活用やネットワーク作りをお願いしたいと思います。

渡邊 何かを始めるとき、行政から外れて行うのは不可能です。密接につながりつつ、お互い協力しながら、子ども食堂を増やすのも良いが、昭和30年代なら、ご近所さんがお風呂に入れてあげたりしていた。近所の人たちに助けってもらった良い時代でした。そういったコミュニティをまた復活できた良いと思います。

(編集部) 中西、伊藤

